方法としての旅

西川長夫

今日の午前中（セッション3）は「イタリアとの知的遭遇」のタイトルの下に，岩倉具忠「新村出とイタリア」，Susanna Fessler「姉崎正治とイタリア」，Silvio Vita「明治の宗教界とイタリア―ヨーロッパ訪問の足跡」という三つの興味深い報告を聞かせていただきました。とりあえず今日の3人の報告者の方々に御礼を申し上げたいと思います。3つの報告に共通しているのは，これまで日本であまり知られていなかった日本の知識人とイタリアとの関係に独自の照明が当てられたことだと思います。

最初の岩倉具忠先生の新村出に関する話は，私は実は自分の書棚に新村出の南蛮に関する3冊の本を並べていて，その一つはとても装訂がきれいで大正末に出た美本の一つですが，新村出とイタリアという形でこれまでものを考えたことかなかった，認識したことがなかったので，とても新鮮な印象を受けました。

それから姉崎正治とイタリア。姉崎は文学関係者には一般に嘲風として知られていますが，姉崎とイタリアという観点で述べられた文章を，僕はあまり知りません。それである大きな文学事典で姉崎のところを引いてみました。第一回のドイツ留学については割合詳しく記されている。ところが第二回のイタリア行きについては全く書かれてないんですね。今日は大変いいお話を聞かせていただいたと思います。

最後のSilvio Vita先生のお話も，岩倉使節団と宗教問題は岩倉翔子先生が出された本もあって，最近になってようやく照明が当てられていますが，まだ十分に認識されていない。私たちは明治初期の宗教の問題をめぐってヨーロッパ訪問が度々行われていたことを知らず，そのことを重要な問題として意識することが少なかったということを，お話を伺いながら強く感じました。そういう点でとても貴重な照明を当てていただいて感謝しています。

ただイタリア訪問者のイタリア認識にもいろいろ問題点があって，そのことを岩倉先生は実に的確に指摘されました。新村出に関してですが，新村出のイタリア認識において手引きとされたのはゲーテの『イタリア紀行』であって，新村は現実のイタリアを見るというよりは文学に現れたイタリアの面影を追い求めた。一種の教養主義ですね。新村出の教養主義の中でイタリアというのは中核を成していたというご指摘だったと思います。この一種の教養主義というのは，これは3人の方が共通して指摘されていることであると思いますが，裏を返せばイタリアの現実に近づくことができなかった。この制約がどこから来ているかについても岩倉先生は明確にご指摘されています。日本の大学のシステム，英独仏語中心でイタリア語は教えられなかった，今はイタリアブームで様子が変わってきていますが，そういう形で日本の近代化が進んでいく中で，イタリアというものがたんだんと注目されなくなるような，知識や教養としては注目されるけども，イタリア人の現実の生活，あるいは現実の社会や歴史が視野の外に置か

れるような構造ができあがっていったのではないかと思います。

おそらく日本の近代の歴史の中で『米欧回覧実記』の時期には現実をとらえようとする強い意欲があって，さまざまな苦労をして現実の社会や政治に接近していった。ところが近代国家の制度が整っていくにしたがって，留学する人も官費留学生として派遣される事が多くなり，教養主義的な態度が強くなる。現地にいきながらも，それは書物の旅であったり，絵画の旅であったり，音楽の旅であったりして，同時代のイタリアの政治や経済，あるいは庶民の生活に対する関心が弱くなってしまっていたのではないでしょうか。

もう一つ歴史的にたどると，今度のシンポジウムでちょっと抜けていると思うのは，日本がドイツやイタリアと一緒になって枢軸国として同盟を結んだ時代の問題，ファシズム期の問題が脱落しているように思います。それは日本のイタリア認識の中で重要な部分のはずです。僕なんかは小さい時にムッソリーニが最大の英雄で，「めんこ」の絵では，少年たちにはヒットラーよりムッソリーニの方が人気がありました。それは戦後のカトリックと共産党のイタリアといった現実にもいろんな形でつながってきているのではないでしょうか。また時代を少しさかのぼると，イタリアがヨーロッパの第三世界と見なされた時代があり（例えばフランソワ・ギゾーの『ヨーロッパ文明史』（1928年）とそれに続く『フランス文明史』ではイタリアはヨーロッパの後発地域である。『米欧回覧実記』でもそのことを見落としていない，例えばナポリに関する記述），そういう現実がこのシンポジウムでも問題にされるべきだと思います。教養主義的でなく，現実のイタリアで「生きる」ことがどのような形を取りうるのか，おそらくそうした問題は午後の第5セッションで扱われることになるのだと思います。

全般の話を通じて，このシンポジウムの主要なテーマはやはり「旅」ではないかと思います。「方法としての旅」というものが考えられていいのではないでしょうか。最後にその点を述べさせていただきます。いろんな側面があるわけですが，それは岩倉使節団もそうだと思いますが，旅の形で日本の近代化が始まっていく。その旅は宗教的に言えば巡礼ということにもなると思います。『米欧回覧実記』も西欧文明への巡礼と考えることができると思いますが，いろいろな土地に向けて旅が行われたけれども，イタリアには特殊性があったと思います。イタリアの旅は他の土地の旅と違って教養主義的であったりするわけですが，ある種の記憶の重層性が働いている。

旅というのは，もう一つの方法として異なった環境，一種の現場であるわけですが，そこで身体的な感覚で，疲労とか快楽とか，そういうものを通じて考える，それが強調されるか，なるべく無視されようとするかという違いがあるけれども，方法としての旅を考える場合に，そういうことがあるだろうと思います。いま私の念頭にあるのは，自分の墓碑銘に「ミラノの人」と書き込ませたスタンダールのイタリアや，アルノ河畔を彷徨う森有正のイメージであったりしますが，私にとってはそうした先人につらなる人として須賀敦子の姿が浮かんできます。